



特集 重厚長大再び

『カラマーズフの兄弟』の新訳全五巻は累計100万部を突破したそうだ。『蟹工船・党生活者』は去年の文庫売り上げトップ10入りしている。

これらの現象は作り方、売り方の問題もあるだろうが、やはり加速している雇用崩壊、格差の拡大といった状況とつながっていることは否定できないだろう。そして、解雇者の数、自殺者の数を新聞テレビに見るとき、おそらくそれと同じくらいの数の子どもたちが安定した生活を失っているのだと私たちは知る。

今年には日本の児童文学史を概観するとき、「現代児童文学」の出発点とされる1959年からちょうど50年目にあたる。思えば出発期の特徴の一つは、社会の一員としての子どもの現実が正面から描かれたその濃厚さではなかったか。

本特集に言う「重厚長大」とは、そういう社会性の強いリアリズムの作品を指す。それらが今再び意味を持つ状況が来ているのではないか、再び出会うことが文学的にも、実生活的にも力になるのではないか。そう考えて、この特集を企画した。